

故 菊池哲彦先生を偲ぶ

1928年12月6日～2012年3月8日

本学会名誉会員の菊池哲彦先生が2012年3月14に83歳で逝去されました。

先生は1961年3月に東北大学文学部博士課程を満期退学後、福島県立医科大学に1年勤務した後、茨城大学に転勤され、定年まで勤務されました。その後、再び教壇に立たれ、1998年から2002年まで愛国学園大学に勤務されました。

先生は、豊かな識見と、何事にも丁寧で、他人の面倒を最後までよくみる人柄で、学生の教育指導、大学内の行政に尽力されるとともに、学者として、研究はもちろん、学会活動にも多くの貢献をされました。

学生指導の面では、それぞれの場で心理学を再生産できる卒業生を送り出すことを目指して、非常勤講師による集中講義の時間枠をできるだけ多く確保し、第一線で活躍中の先生方を招く等、高い水準の教育をしようと心理学教室をリードされました。その成果の一端は、大学教員になっている卒業生の数に示されていると思います。

学内行政の面では、78年から82年までは人文学部長を勤められ、共通一次試験の導入や学部の再編等のさまざまな課題の解決に指導力を発揮されました。その間82年には学長事務取扱の重責を果たされるなど、ご苦労が偲ばれます。

先生は、臨床問題と交通問題に関する研究で、応用心理学上大きな貢献をされました。

臨床問題に関する研究と実践は、修士課程修了後、大脇義一教授の指導に従って、2年間伊豆大島の児童施設に勤務され、入所児童の心理判定や生活指導にあたったことから始まっております。この発達臨床に関する研究は、博士課程に進学されてからも、実践の場を宮城県の児童相談所に移して続けられました。そこでは相談所のスタッフとのケースカンファレンスを行うことはもとより、同所へ実習に行っていた大学院の後輩と一緒にブラインド分析を行ったりしてスーパーバイザーの仕事もされていました。

北村晴朗教授の指導のもとに行われたパーソナリティの統御機能に関する共同研究では、さまざまな実験を具体的に指導されました。これは東北大学医学部の精神科および産婦人科との共同研究で、アルコールやラボナルなどの薬物の影響下にある意識を質問紙検査やロールシャッハ検査を用いて検討したものです。実験は統制群法を用いて行われましたが、被験者の安全や健康管理などたいへん気を使う実験でした。ちなみに、産婦人科が関係しているのは、当時の同科は九嶋勝司教授の下で精神身体医学の研究を行っていたからです。

一年間の福島県立医科大学勤務を経て茨城大学へ移られてからは、毎週いわき市にある単科の精神科病院に通われ、主としてロールシャッハテストを用いて患者の心理判定を続けられました。その判定結果は、病院のスタッフとのケースカンファレンスにおいて高く評価されておりました。これは定年後も続けられ、膨大な資料を蓄積されているはずで、成果をまとめることができずにこの世を去るのは残念だったことと思います。

先生は投影法や質問紙法などの心理検査法に精通されていると同時に催眠技法もマスターされておられるなど、心理療法家としても優れた方でした。



交通問題に関する研究は、ご自身の研究を菊池哲彦著『自動車事故の心理学的研究』（企業開発センター交通問題研究室，1994）にまとめられました。その中で、①1960年から1964年まで続けられた宮城県の仙北鉄道株式会社の運転者の研究で、先生が作られた質問紙による人格検査が、現在事故対策機構で使用されている質問紙検査の基礎になっていること、②「交通事故は運転者の生活空間との関係でとらえる必要がある」という考えから、若者の交通行動とその背景を分析した研究「青少年と運転免許」が高く評価され、1979年に第一回の国際交通安全学会賞を受賞されたこと、③交通事故に関する一般理論の必要性の強調、は特筆されると思います。

学会活動にも力を注ぎ、日本応用心理学会の常任理事、日本交通心理学会の運営委員の職につき活躍されました。1990年9月には、日本応用心理学会第57回大会の委員長を務められました。

長年の功績が認められ、それぞれの学会から名誉会員の称号が与えられました。2008年5月に、瑞宝中綬章の栄に浴されたこともおめでたく嬉しいことでした。

長い間ご指導有難うございました。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

（鈴木由紀生）